

フィールドワーク便り

「呪術師のところに行こう」

—東アフリカ・ザンジバルの暮らしの中で—

井上 真悠子*

私が滞在していたザンジバルは、タンザニア連合共和国の東端に位置する、インド洋にうかぶ島じまである。地理的にはアフリカの一部でありながら、文化的にはアラブやインドからの影響が大きい土地柄で、住民の90%以上がイスラーム教徒であるといわれている。特に、ザンジバルの中で最も大きい都市であるウングジャ島のストーン・タウンには、アラブ的な顔立ちの人々も多く暮らしている。女性たちはみな、家の中ではカンガとよばれるタンザニアの布を身にまとい、外出の際にはブイブイとよばれる真っ黒な外出着を着て、ハチミツのような甘ったるい香水の香りを漂わせている。ここはまさに、アラブとアフリカの中間点のような場所だ。

アラブ風の街並みが今も残るストーン・タウンや、奴隷貿易の歴史、クローブ（丁子）などのスパイス農園、インド洋に面したビーチといった豊富な観光資源をもつザンジバルは、タンザニアの中でも有数の観光地である。そしてストーン・タウンはインフラも整備されており、市場に行けば生活必需品から贅沢品までひとつおりの物は揃い、近代的な病院や薬屋も街のあちこちにいくつも点在し

ている。若い女性たちは、ブイブイやカンガの下には派手なキャミソールなどを着て豊かな身体を美しく飾り、かかとの高い華奢なサンダルを好んで履く。口紅やアイシャドー、マニキュアやペディキュアといったお化粧品も大好きだ。街を歩きながら、どこの美容院が安いか、上手いかと言い合うさまは、日本の都会の若者と大差ない（写真1, 2）。私はこれまで、合計8ヵ月ほどをこの観光地であるストーン・タウンで過ごしながらか調査をおこなった。そして私は、この土地の人々とともに暮らすうちに、近代的な都市生活にみえる暮らしの中に存在する、不思議な「問題解決



写真1 市場の風景

手前を歩いているのはブイブイを着た女性。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 ブイブイを脱いだ若い女性
露出の多い服やアクセサリで着飾ることを好む。

方法」を体験することになったのである。

当時、私はストーン・タウンの中の民家で下宿生活をおくっていたのだが、そこでの暮らしも3ヵ月ほどが過ぎた頃のある日、ベッドの下に置いてあったはずの、私のカバンがなくなった。私が使っていた部屋は、お世話になっていた家の最上階の屋根裏部屋のような場所だったので、そこまで上がってくるのは、せいぜい家の子どもたちか親戚の若者たちくらいのはずである。いったい、誰が私のカバンを持っていったのだろうか。

ここ数日のあいだに私の部屋に入ったのは誰だったかということ、居間で家の人たちと長々と話し合ってみたが、しかし、誰が犯人かもわからないし、どうしようもない。どうしたものか…警察かなあ、などと考えていると、17歳の長女が立ち上がり、「呪術師のところに行こう！」と言い放った。そして長女は母親に、あの辺にああいう呪術師がいたよね、というようなことを早口で確認すると、紙を取り出し、私の部屋に入った可能性のある人物の名前を書き始めた。

父親、母親、長男をはじめとして長女自身

も含めた8人の子どもたち、長男の友人が1人と、母方の叔父が2人、出戻りの腹違いの姉が1人。この腹違いの姉は、「この子のことも疑ってるなら、名前を書いていってもいいわよ。この子はまだひとりでは階段を昇れないけどね」と、自分の生まれたての娘を指して笑った。名前を書き終ると、長女は私にブイブイを着せ、自分もブイブイを着込み、私の手をとってストーン・タウンの東端の大通りへと歩き出した。

タンザニアには、スワヒリ語で「ムガンガ (*mganga*)」とよばれる呪医・呪術師がいる。ひとくちに呪術といってもその手法や性質はさまざまで、生薬のような薬草を使うものもあれば、イスラームの聖典であるコーランを使うもの、「ジニ (*jini*)」とよばれる精霊を憑依させたり使ったりするものなど、いろいろな施術方法がある。

ストーン・タウンでは、呪術に関することは、おもてだつては「迷信だ」といわれることのほうが多い。だが、対岸のタンザニア大陸部のタンガ州からも出稼ぎの呪術師がザンジバルに来ているといわれるくらい、ザンジバル社会における呪術師の需要は高く、それは都市部であるストーン・タウンにおいても例外ではない。人々が何らかのトラブルや困難に遭ったとき、その解決方法として彼らの頭に思いうかぶのは、けっして近代的な病院や警察だけではないのである。

私の手を引いて歩いていた長女は、ストーン・タウンの外れにあるモスクに隣接する建物の中に入って行った。建物の奥には女性ばかりがいる部屋があり、さらに奥には、薄暗

い寝室があった。長女はそこでひとりの老女に面会を申し込み、私を連れて薄暗い寝室の中へと入って行った。

長女は老女に、私の部屋の様子と、カバンが置いてあった状況を説明した。老女はひとしきり長女の話の黙って聞くと、私の部屋に入った人たちの名前はわかるかと長女に訊いた。長女が家でいくつかの名前を書いた紙をみせると、老女はおもむろに厚い革表紙の本を取り出した。日記帳のように鍵がかかるといったようになつた、古い本である。

老女は本に革紐と金属製の短い棒を取り付けると、金属棒の片端を長女に指一本で支えさせ、もう片端を自身の指一本で支えた。ふたりの指で支えられ、革表紙の本は空中にぶら下げられた。そして、老女は長女に、ひとりずつ名前を読み上げるように指示した。長女は緊張した面持ちで、ひとりひとりの名前を読み上げていく。すると、長男の友人の名前を読み上げた瞬間、本がぐるりと回った。つまりこれは、犯人探しのためのダウンジングだったのだ。

老女から、「犯人にこのことを知らせてはいけない、そのまま明日を待て」という指示を受けて、長女と私は家に帰った。すると翌日、カバンは私のベッドの下に戻っていた。さすがにその日は部屋に鍵をかけていたし、その一日のあいだには、犯人だといわれた長男の友人どころか、長女も含めた子どもたちも、誰も私がいなくなるときの部屋に入った人はいなかったはずなのに…。

カバンが出てきたからくりは、いまだによくわからないままである。しかし、ダウンジ

ングの真偽のほどはひとまずおいておくとして、まずはカバンがなくなったというトラブルに際し、長女の頭の中に即座に「呪術師」という選択肢がうかんだことに、私は正直のところ驚いていた。しかも、呪術師に会いに行く前に犯人候補たちの名前を準備する必要があるということ、家族たち全員が当たり前のこととして知っていたのだ。老女の所在地はすぐにわかったのだから、もしかしたら彼らは以前にもこの老女に何かしらのトラブルの解決を依頼したことがあったのかもしれない。しかし、それよりも何よりも驚かされたのは、カバンが出てきたあとの「やっぱり呪術師ってウソツキね！ カバンは家にあつたんじゃない！」という、長女の一言であつた。自ら呪術師のところに行こうと言いつつ、犯人がわかったときにはショックを受けて、「やっぱり彼は普段の素行からして悪いと思っていたのよ！」などと悪口を言っていたくせに、カバンが出てきた途端、まるですべての出来事がなかったかのように呪術師の怪しさをあざ笑い、犯人といわれた長男の友人に対しても、その後にはいつもどおりに平然と接していたのである。

ザンジバルで暮らしていると、こういった不可解な経験は、挙げるときりがなくいろいろなところで出てくる。調査がうまくいかなくて夜中にひとりで泣いていたときには、心配して様子を見に来てくれた長男に、「ああ、頭の中の『虫』が悪さをしてるんだね。あなたもジニをもっているの？ うちのママもそうで、突然知らないはずのアラビア語をしゃべりだすんだよ。だから、大丈夫」と言っ

慰められたことがあった。彼が言うには、私の頭の中には「虫（ジニ）」がいて、それが悪さをするから私は泣いているらしいのだ。しかし、翌朝になってもう一度ジニの話をしようとする、長男は笑って私をバカにするような冗談を言い、はぐらかすばかりであった。

ほかにも何度か複数の人に「ジニもち」であると指摘された私は、ジニを祓うための治療儀礼に参加したこともあった。ある時には、モスク内で30～40人ほどの男女と一緒に5メートルくらいの大きなゴザを頭から被り、中で薬草の蒸気を浴びる「ヨモギ蒸し」のようなサウナ療法を施された。一緒にゴザの中に入っていた人の中には、彼らの「ジニが暴れだした」らしく、トランス状態になって叫びだす人や暴れだす人もいた。

また、ジニの憑依をとまなう治療儀礼をおこなう呪術師のところでは、私は頭から大きな布を被せられ、薔薇の香水をかけられ、「ウディ (udi)」とよばれる少し甘い匂いのする香木を焚かれてその煙を吸わされた。そして、部屋の隅に置かれたテープレコーダーから流れる“*Baharini kuna njiwa manga na mandege na njiwa manga...*(海には鳩と鳥がいっぱい…)”という、スワヒリ語の歌のような呪文を聞いているうちに、強い倦怠感と眠気におそわれた私の身体は震えだし、口が痙攣し、勝手にしゃべりだしたこともあった(写真3)。

しかし、これらのことも、日常の文脈の中で誰かにしゃべれば、「お前、なんで呪術師のところになんか行ってるんだよ!」と、バ



写真3 ジニの憑依儀礼を受けている筆者
奥にいる男性がムガンガである。

カにされたり笑われたりするようなことなのである。

スワヒリ語でムガンガというときには、占い師から薬草治療師、イスラームに関係する治療師、ジニの憑依儀礼をとりおこなう者まで、さまざまなタイプの施術者が含まれている。それらに共通するイメージは、「怪しげな治療をおこなう」というものであり、おもてだっては、近代医療や近代国家の行政などとは異なる、非科学的で時代遅れな迷信として扱われている。

しかし、そうして「怪しいもの」として扱いつつも、ザンジバルの人々の生活の中において「呪術師に相談する」という選択肢は、近代的な病院や警察などと同じように「さまざまなトラブルや困難を解決するための方法のひとつ」として、現代においてもたしかに存在しているのだ。何が科学的で、何が怪しいことなのかといったことは、問題が解決されたあとになってからなされる会話であり、問題の渦中にいる人間にとっては、科学的であろうがなかろうが、とにかく問題が解決されることが最優先なのである。だから

ら、もしまたトラブルや困難に直面した時には、人々は再び「呪術師のところに行こう」と言うのだろう。たとえ、問題が解決した後

には「呪術師って、インチキだよな！」なんて、笑ってバカにしていたとしても。

同じかまの飯を食べて

片山 祐美子*

「シンキロー」。ある日の昼下がり、朝の調査を終えて村の人たちとベンチに寝そべて昼食ができあがるのを待っていた私の耳に、聞き慣れた言葉が入ってきた。蜃気楼？何のことだろう。以下はそのシンキローにまつわるお話。

私の調査地は、西アフリカのガンビアという小国にある。「調査地はどこ？」と聞かれ、「ガンビアです」と答えると、必ずといっていいほど「あー、ザンビアね」という答えが返ってくる。そんな、あまり広く認知されていないこの国は、国土の西約80kmを大西洋に面しているのを除けば、セネガルにぐるりと三方を囲まれて東西に細長い。くによくにやと蛇行し、ミミズのような格好をしている。東から大西洋に向かって流れるガンビア川に沿って国境が走っているせいである。この奇妙な形が、ときに、ガンビアを「セネガルの横っ腹につきたたナイフ」、「セネガル・パンにはさんだガンビア・ホットドッグ」などと形容させる。

調査のために約1年を過ごしたバンタント

村はガンビア川の中流域にある。ガンビア川に生息する豊富な魚たちを利用して暮らす漁撈民が生活しているのかと思いきや、そこにはマンディンカと呼ばれる農耕民が暮らしていた（写真1）。

彼らは雨季にコメや雑穀といった主食作物を栽培して暮らしている。女性は村から1kmほど離れた水田でイネを育て、乾季には小さな井戸をたくさん掘った畑で毎日水やりをしながら野菜を栽培し、労働に励んでい



写真1 村の風景

密集する家の周りに雑穀畑が広がっている。電線がみられるが村に電気はない。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

る。一方、乾季には村内で一日中ごろごろしている男性も、6月から始まる雨季には朝食もとらずに畑へ働きに出る。

バンタント村は、大小さまざまな59のコンパウンドからなる。数軒からときには20軒を超える住居が長方形に並び、その外周にはトウジンビエの茎で作られた柵が立っている。このトウジンビエの茎で囲まれた敷地がコンパウンドである。

私の家は、サナファンタクンダと呼ばれるコンパウンドにあった。コンパウンドは、父系親族を基礎としており、名字にクンダをつけた名前と呼ばれる。このコンパウンドはファーティー姓であったが、バンタント村にはファーティー姓のコンパウンドが30以上もあるため、ファーティークンダという呼称は使われず、うちのコンパウンドは初代コンパウンド長の名前を用いてサナファンタクンダと呼ばれていた。私は村入りした日に、村の長老から現地名をいただいた。ファトゥマタ・ファーティー。夫婦の間に生まれた第一子が女の子であった場合、その女児の正式名称は必ずこれである。そのため、バンタント村には数え切れないほどの同姓同名がいた。私はこの名前のおかげで、ガンビア滞在中には本当に多くの人に助けられた。

バンタント村での4ヵ月間の調査の後、私は広域調査に出かけた。ガンビアの地図を広げ、「今日はこの辺に行こう」と目星をつけ、その村に向かう長距離バスを探す。バスを見つけて乗り込もうとすると、背中に背負った少し大きめの荷物はバスの上に乗せろと言われて、法外な料金を請求される。現地の人も同

様に高い料金を吹っかけられてはいるが、白人扱いされたと感じ、おもしろくない私は鬼のように料金を値切っていく。同じバスに乗り合わせたガンビア人が払っている額より安く済ませてしまったこともある。値切りきれなかった経験ももちろんある。交渉を終えてやっとバスに乗り込む（写真2）。

バスは5人座りの座席が4列、正面を向いて並んでおり、うしろのドア近くには窓に沿って4人がけの椅子が両脇に並んでいる。車内は狭く、お尻の大きな女性が乗り込んできたときには誰かのお尻が浮いてしまうことになる。うしろのドア付近に席を確保した私は、走り出した車内で両脚を踏ん張っていた。椅子の奥行きが狭いため、油断していると滑り落ちるのだ。ゆれる車内で窓に頭がぶつからないように椅子の端を握ったり、斜め前を向いて座ってみたりと創意工夫していた私に、隣り合わせた青年が声をかけてくる。「名前は何？」英語だ。村では完全に現地名の愛称、ファートウ・ファーティーで呼ばれていた私は、考えもなく「ファートウ・ファーティー」と答えていた。私のことをただの観



写真2 長距離バス

光客だと思っていた彼と周りの乗客は面食らう。彼は「ファーティーは敬虔なムスリムだ。素晴らしい」とマンディンカ語で言った。「ありがとう」と気分よく返事をした私に、私の向かいに座っていたスーツを着た大柄な男性が言った。「ファーティー!? あんな名字は捨てて、今すぐマーネ姓を名乗るんだ。」彼はさらに続ける。「ファーティークンダの奴らは仕事もせずに毎日食っちゃ寝、食っちゃ寝。腹を見ても。ぼっこり出ていて醜いったらないよ。」おなかの前で手を組み、大きいおなかをジェスチャーで示してくる。「そのおなかで言うか?」ぼっこりと出た彼のおなかに視線を向けながらも、その言葉は飲み込んでおいた。その代わりにこう返した。「マーネクンダのあなたたちだって仕事もせずに、こうやって人の悪口言っているだけでしょ。あんたたちの仕事は毎日木陰に座っておしゃべりすることなんだって?」ファーティーとマーネは初対面であっても、このようにしばしば相手の姓を貶し合う関係にある。決して仲が悪いわけではない。バスに乗り合わせた周りの人たちも笑い出す。

「どこから来たの?」次の質問がきた。私は「バンタント村」と答える。誰も「日本」という返事を期待してはいない。ガンビアの小ささがここで役に立つ。私がこれまで言葉を交わしたガンビア人の半数はバンタント村を知っていた。バスの正面を向いて座っていた青年が首をこちらに向けて質問を続ける。「どこのコンパウンドに住んでるの? アリカロ(村長)クンダ?」「いや、サナファンタクンダってところ。」「知ってるよ。コン

パウンドのボスの名前はイラーマンだろ?」「何で知ってるの?」「あのコンパウンドには俺の母親がいるんだ」「誰?」「タコっていう背の高い女性だよ。知ってる?」彼の実の母親の実父と継母の子どものひとりがタコだった。彼は一時、学校に通うためにバンタント村に住んでいたと言い、タコの子どもと寝食をともにしていた頃の話をしてくれた。「蜃気楼」という単語が耳に入ってきた。マンディンカ語をそれほど理解できていなかった私は、とりあえず彼の話の腰を折るまいと話の続きに耳を傾けた。タコの息子は私にとっては父親だ。「どこへ行こうとしているの?」と尋ねられ、広域調査のためにある村を訪れようとしていることを説明すると、その村の近くに彼の友人がいるという。私は目的地を急遽変更し、その友人のコンパウンド名と名前をフィールドノートにメモした。青年が教えてくれた村を訪れ、彼の娘として迎えられた。村を離れるときには調査に適した次の村を紹介してもらった。広域調査を終えて、20日ぶりに村に帰る頃には、「～さんによろしく」という伝言は10を優に超えていた。「ファートゥが帰って来たー」と猛ダッシュで迫り来る大群に迎えられ、村での調査に戻った。

私の暮らしたサナファンタクンダは、大人26人、子ども36人、総勢62人の大所帯である。伝統的な円形の藁葺き屋根の建物が10軒、横に長いトタン屋根の長方形型の家が3軒、敷地内に所狭しと並んでいる。

すべての家の入口付近には数人が寝ることのできるサイズのベンチが置かれている。さ

らに、コンパウンドの中心には10人ほどが寝そべることのできる大きなベンチが2つ鎮座している。ひとつはケーキンダー、もうひとつはムスクンダーと呼ばれ、ケーキンダーは主に男性が、ムスクンダーは主に女性が集まる。たいてい賑わっているのはムスクンダーの方である。朝の農作業から帰ってきた女性を中心に、昼下がりにには多くの人が集まってくる。寝ている者、昼食の調理をしながら休んでいる者、娘の髪を編んでいる者、おしゃべりをしている者など、みんなおのおのの時間を楽しんでいる。私はここで「蜃気楼」を再び耳にする（写真3）。

ムスクンダーのそばにあるベンチから、それは聞こえてきた。そこでは、30分ほど前から5人の男性がアタヤを飲みながら談笑していた。アタヤは、手のひらに載るほどの急須で中国緑茶を沸かしたものに大量の砂糖を入れた飲み物だ。専用の小さなグラスに注がれたアタヤを飲み干し、新たに注がれたアタヤをほかの誰かが飲む。このように数人で回

し飲みしていく。一巡目のアタヤがなくなっても同じ葉であと2回は沸かす。1時間以上に及ぶ至福の時だ。近くに座っていると、私にもそのグラスが差し出され、砂糖の味しかない飲み物をいかに気を悪くさせずに断るか、いつも思案していた。

私は隣で寝転んでいた女性に「蜃気楼って何？」と聞いてみた。彼女は、マンディンカ語で話し始めた。彼女は、眉間にしわを寄せて彼女の言葉に耳を傾けていた私を昼食の準備が行なわれている調理場へ導いた。トタンで囲まれた調理場では、2人の女性が昼食の準備に追われていた。米を炊いている鍋を支えている石を指差して、1・2・3と数えてみせ、そのセットがシンキローだと説明してくれた。「蜃気楼」とはかまどのことだったのかと合点した（写真4）。

その3日後、村長がコンパウンド長のもとにやってきた。コンパウンド長が「シンキローは3つだ」と言う。3つの石の話をして



写真3 ムスクンダー

すぐ横に植えられたニームの樹が酷暑の昼下がりに涼を提供する。



写真4 蜃気楼という名のかまど

いるのかと思って耳をそばだてていると、村長が「シンキロー27」と言った。かまど用の石を27個にして何をするのかと疑問に思い、いつも根気よく物事を教えてくれる女性のところに聞きに行った。この村ではシンキロー、つまりかまど単位で物事を考えることがあり、村長は村のかまどの数を把握するためにコンパウンドを回っていることを教えてくれた。昔、このコンパウンドではひとつのかまどで炊いた飯をみんなで食べていたが、時がたち、人の数が増え3つのシンキローに分割されたこと、調理は同じかまどに属する既婚女性が交代で担当することなど、かまどに関するいろいろな話をしてくれた。私はこの日、「蜃気楼」に踏み込んだ。

いつも同じシンキローのみんなと食事をしている最中に誰かがそばを通りかかると、「一緒にどうぞ？」と声をかける。私も昼食時に村内を歩き回っているとよく声をかけられる。初めは遠慮しすぎてみんなに非難されていた私も、村生活ですっかり胃袋が大きくなり、気も大きくなり、遠慮しなくなっていた。ある日、いつも一緒に食事をする年配女性に呼ばれた。これからは、お呼ばれする相手ももう少し見極めた方がいいと言う。誘われてご飯と一緒に食べることはいいことだけれど、むやみやたらではいけない。私はもう、彼女と同じシンキローの一員であり、呼ばれた食事に手を出すのは、特に仲の良い友達や母親代わりの女性たちなどに限った方がいいとのことであった。もちろんそれ以外の誘いでもたまには受け入れ、いつも断ってばかりでもいけない、と。そんな微妙な匙加減

が私にできるだろうかと、この風習を煩わしく思った。

それ以来、シンキローの枠から外れた者同士で食事をする場面が気になり始めた。どんな関係の人なら一緒に食事をして問題ないのか。昼時に談笑していた青年や中年男性がそのまま昼食をともにする場面、一緒に農作業した者たち、グループ集會に参加した者、近隣の野菜畑で野菜の水やりをする少女たち、さまざまな場面でみられた（写真5）。

夕日の沈むころ、一足先に労働から解放された女性たちはベンチに座り、農作業を終えて家路につく人たちと挨拶を交わしたりしながら、夕食の合図を待っている。私はベンチに座って、野菜畑から収穫してきたサツマイモの葉を束ねていた。となり町の市場で翌朝販売するためだ。そんな私の横で、女性がバライロ（*Combretum micranthum*）と呼ばれる植物を煮出したものに砂糖をたっぷり加えた紅茶のような飲み物を1歳半の息子に飲ませている。3日前、彼女の息子は高さ80 cmほどのベッドから落ち、体調を崩していた。



写真5 労働を終えた女性たち
田植え作業を終えてグループで一緒に昼食を食べる。

口の周りほただれ、舌にはにきびのような白い点々が無数にあった。転落してから、母乳もほとんど受け付けず、食べ物も口にしていなかった。そこに、1歳9カ月のファトゥマタが泣きながら通り過ぎた。野菜畑での水やり仕事からなかなか帰ってこない母親に痺れを切らし、無謀にも畑に向かおうとしていた。おなかが減っているためか泣いている。泣きながらパタパタと小走りで駆けて行く彼女を、姉が連れ戻そうと追いかける。息子の

口をこじ開け、バライロ紅茶を流し込んでいたお母さんが2人を呼び止める。「息がおっぱいを飲んでくれないから、お乳が張って痛くって。」姉がファトゥマタを抱き上げ、ベンチの上に座らせる。ファトゥマタは怪訝な顔ひとつせず、四つん這いになって異母の母乳を飲み始めた。彼女は左右の母乳を堪能し、満足そうに姉に連れられて帰って行った。シンキローを超えた共食の極みを見た気がした。

「気づき」がもたらすもの

—あるインドネシア人女性のエンパワーメントのはなし—

竹 安 裕 美*

インドネシア・南スラウェシ州のジェネポント県をはじめ訪れたのは2003年の7月のことだった。当時私は某独立行政法人の海外ボランティアとして北スマトラ州のとある村に赴任していた。村人の生活改善を目指すプログラム作りとその実施という、開発協力に従事する者には一見やりがいがあるように思えるが、その実、漠然とした目的の職務になっていた私は、当初の鼻息の荒さもどこへやら、なかなか思うようにいかない仕事の突破口を求めている。

そんな折、かつて日本での仕事を通して知り合いになっていた南スラウェシ州で活動するNGOのスタッフであるA氏とジャカルタ

で偶然再会した。久しぶりの再会に大喜びするとともに、内心忸怩たる近況を話しながら、私は南スラウェシでの活動を見学させてほしいと頼みこんだ。強引な私の申し出を受けて、A氏が連れて行ってくれたところがジェネポント県であり、そのとき紹介してくれたのがNさんという女性だった。

Nさんは当時30歳で、村の女性としては珍しく独身だった。北スマトラの村では30歳をこえた独身女性に出会うことがなく、心のどこかで寂しい思いをしていた私は、インドネシアではじめて出会った同年代の独身女性に親近感をもった。A氏とともに突然訪問した日本人の私を、彼女は快く迎えてくれた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 塩田の様子

乾燥地帯の沿岸部では塩作りは主要産業のひとつ。かなり内陸まで海水を引き込んでおり、広大な塩田が広がる。

ジェネポント県は、漁業やテングサの養殖、塩田による塩作りを生業とする沿岸部、稲作やトウモロコシ栽培をおこなう内陸平野部、それに野菜やコーヒー栽培が盛んな内陸高地部の3つの地域からなる。このうち県面積の8割近くをしめる前2者が、南スラウェシ州で経済的にもっとも貧しい地域になっている。その背景には、乾燥した気候に代表される自然環境、灌漑施設の未整備、土地無し層が多いことによる社会的要因などがある。だが、同地では国内外からの貧困削減のための援助プログラムが数多く実施されており、現在でもオーストラリアのAusAID(オーストラリア国際開発庁：The Australian Agency for International Development)、世界銀行などが大掛りなプログラムを展開している。

Nさんの家は沿岸地域にあったが、両親は農業を細々と営んでおり、両親、妹、従妹と住むこぢんまりとした高床式の家は質素な造りで、そこから彼女たちの経済状況をうかが



写真2 内陸高地部の様子

沿岸部と異なり棚田や段々畑が広がり、景色が一面の緑に変わる。

い知ることができた。彼女は、NGOのさまざまな教育プログラムを通してリーダー的素質を開花させた女性グループのリーダーであり、ヤギ銀行(ひとつのグループにつがいのヤギを支給し、飼育担当者は子ヤギが生まれたら1頭を自分のものに、残りを他のメンバーに分配し回転させていく、というもの)やマイクロクレジットを運営していた。NGOのプログラム自体は1年前に終了していたのだが、その後も近隣の活発なグループとともに活動をつづけ、ついにはいくつかのグループと共同で新たに協同組合を設立し、マイクロクレジットを中心に規模を拡大させていた。

彼女はグループの活動を知りたいという私の要望にこたえ、自分のグループの活動内容を失敗談もふくめて話してくれたり、他のグループメンバーの家へ連れていってくれたり、自分たちで立ち上げた協同組合の事務所に案内してくれたりした。北スマトラの村では見たことがなかった村人によるグループ活



写真3 共同組合の事務所にて

マイクロクレジットの帳簿を見せてくれるNさんとメンバー。帳簿つけはNGOのトレーニングで学んだスキルだという。



写真4 カーテン作りのコツを教えるNさん

近所の女性メンバーがわからないことをたずねにきていた。今もこうしたささやかな活動を続けているのだろう。

動を実際に見ることができ、そして何より、実際に自分たちで活動をおこなっている村人たちに会えて、私は興奮しっぱなしだった。

Nさんの村から戻って、私はその報告のためにNGOの事務所にでかけ、Nさんたちの活動に非常に感銘を受けたことを話した。そして、彼女たちの行動力の源は一体何なのか、とA氏にたずねてみた。その質問を待っていましたとばかりに、A氏は嬉しそうに一言「サダール sadar (気づいたんだ)」と答えた。

彼によると、彼女は一連のNGOの活動を通して自分の可能性、すなわち「自分は何もできない無力な人間ではないんだ、自分でも今の生活を改善できる」ことに「気づいた」のだという。ひとつのことができるようになると、それが自信となって次のことに挑戦し、それができるようになるとさらに自信がつき、活動が広がっていく。自分の「できること」がひとつひとつ増えていくことが喜びとなり、それが原動力になっているのだという。この「できること」が増えていく過程

が住民参加型村落開発プログラムでもっとも大切な「エンパワーメント」のプロセスであり、NGOの使命は「気づき」をもたらす機会をできるだけたくさん提供することにあると、A氏はたくさんの実例をあげながら話してくれた。

「エンパワーメント」とは何だろうか。最近学んだわかりやすい事例を紹介しよう。広い草原に1匹の鹿を連れてきて、透明な壁で鹿を囲ってしまう。すると鹿は囲いに気づかず何度か壁にぶつかって痛い目にあう。そのなかで鹿は壁の存在を体得し、壁にぶつからないように行動しはじめる。そうなると、壁を取り払っても、鹿は壁があったところから外に出ようとはしない。しかし、もし鹿が壁の不在に気づけば、ふたたび広い草原を自由に走りまわることができるようになる。こうした「気づき」によって行動できるようになることこそがエンパワーメントである。Nさんと彼女の仲間たちは、それまで無意識のうちに自分たちの行動を制限していた見えな

い壁をのりこえ、行動の範囲を広げていっているのである。事実、Nさん自身、グループのリーダーとなったり、大勢の人を前にして話すことなど、以前では考えられなかったことだ、と話していた。

最初の出会ってから3年後の2006年、私は別の仕事で彼女と再会する機会にめぐまれた。協同組合の活動は3年前より縮小していたが、数名の活発なメンバーとともに貯金活動をつづけていた。さらに驚いたことに、彼女はAusAIDのプログラムにローカル・ファシリテーターとして採用され、隣村でのプログラム責任者となっていた。かつてNGOスタッフが彼女にしていたように、今度は彼女が近隣の村々の女性たちに働きかけ、グループ活動を勧めていた。時間的制約から彼女の活動先を訪れることはできなかったが、ますます精力的に活動を展開している彼女を頼もしく思い、話を聞きながら何度も「すごいすごい」と連発していた。そんな私に彼女は照れながら「私はNGOのおかげで人前で話もできるようになったし、自分たちの暮らしを自分たちで改善できることを知った。かつての私のような女性たちに、私のようにしてほしいと思って活動をしているだけだ」と語ってくれた。そんな彼女は3年前よりもさらに貫禄が増し、地域の女性から頼られる存在になっていた。もっと驚いたことに、彼女はこの3年間に結婚し、元気な男の子を授かっていた。しかもレンガ造りの立派な新居を近くに建設中であった。公私ともに充実している彼女をととても誇らしく思った。

その後2007年の夏に私は再度ジェネボン



写真5 母となったNさん
最愛の息子とともに。

ト県を訪れた。今回はこれまでと異なり、大学院生としてフィールド調査をするためである。今回は「グループ活動がうまくいっていない地域」を調査することが目的だったため、Nさんの村とは別の村を調査地を選んだ。でも同じ県内だからきっと彼女を訪れる機会はあるだろう、とあまり気にせずに行った。

調査村へはA氏の妹でAusAIDのプログラム・マネージャーをしているFさんの案内でむかった。Nさんと同じプログラムだったので、私は彼女のさらなる活躍ぶりを知りたくて、Fさんに様子をたずねてみた。するとFさんは私の質問に困惑したように顔を曇らせしばらく黙っていたが、やがて「彼女はAusAIDから解雇されたのよ」と静かに答えてくれた。

彼女によると、NさんはずっとAusAIDのローカル・ファシリテーターをつづけ、昨年にはシニアレベルのファシリテーターとして

新人ファシリテーターを指導する立場にまでなっていたという。ところが、これまで非常勤だった小学校教師の職が今年から正規雇用になり、そちらの業務が増え、ファシリテーター業務に支障をきたすようになってしまった。状況は日を追うごとに悪化し、ついに数ヶ月前にAusAIDから解雇されてしまった、ということだった。

正規の教師になるのは狭き門だと聞いていたし、正規雇用は終身雇用を意味し、退職後の年金が保障されている。いつプロジェクトが完全撤退してもおかしくないAusAIDとの契約と比べれば、Nさんが正規の教師になれたことはとても喜ばしいことであり、彼女の選択も理解できる。しかし、この事実を私はなかなか受け入れることができなかった。

おそらく、村落開発に関わりつづけていたいと思っている私にとって、Nさんは「エンパワメント」の実践者であり、いつからか私の活動の目標になっていたのだろう。それ故、彼女はずっとファシリテーターをつづけるものだと私は勝手に思い込み、エンパワメントの辿りついた先が教師という、村落開発と直接関係のない職業である事実に納得できなかった。

結局、ジェネポイント県滞在中にNさんの村へは行かなかった。彼女とは携帯電話で話をしていただけだった。彼女は相変わらず元気にしており、AusAIDのことは残念だったが教師の仕事の傍ら協同組合の活動はつづけているとのことだった。会えなかったことをとても残念がり、新居はすでに完成したから今度来る時にはかならず泊まりに来てと言ってくれた。

電話を切ったあと、変わらぬ友情で接してくれる彼女に対して失望感を抱いた自分が恥ずかしくなった。彼女はファシリテーターではなくなってしまったが、以前と同様、精力的に日々を過ごしている。エンパワメントが彼女にもたらしたものは消えることなく彼女のなかに存在しつづけているのだろう。正規の教師になれたのもエンパワメントの成果かもしれない。私はようやくこれも現実、と考えられるようになり、自分の勝手な感情から彼女に会わなかったことを深く後悔した。

次のジェネポイント県滞在の際にはかならずNさんの新居に行き、彼女といろんなことを語り合おうと思う。そして彼女のパワーをまたわけてもらうのだ。